

ニューズレター2007年大会臨時号

目次

1. 大会開催にあたって

井桁碧・大越愛子

2. 6月24日(日)『女性・戦争・人権』学会大会のプログラム

■発表要旨

■シンポジウム 軍事主義に抗するフェミニズム

～沖縄と韓国からの報告～

沈黙を強いる力に抗して声を上げる

共に脱暴力、脱軍事化社会（真の安全と平和な社会）

を築くために

高里鈴代

軍事化という過程を想像するということ

－韓国の志願制への主張と沖縄米軍基地を

めぐる「負担軽減論」を中心に－

鄭 柚鎮

井桁碧・大越愛子

1. 大会開催にあたって

「女性・戦争・人権」学会の2007年大会のプログラムと発表レジュメをお届けいたします。今回のテーマは、「軍事主義に抗するフェミニズム ―沖縄と韓国の米軍基地からの報告―」です。

1997年に日本軍性奴隷制問題に直面することから始まった当学会は、2000年に開催された「女性国際戦犯法廷」そして2001年に出たハーグ判決に多くを学び、韓国の「女性・戦争と人権センター」と東アジアの歴史をジェンダー視点で再考する共同研究に取り組みました。その成果として2005年に『ジェンダーの視点からみる日韓近現代史』を刊行することができました。そのプロセスにおいて、まさに軍隊という構造的暴力がいかに女性の生と性を脅かす要因であるかが明白に把握されました。

私たちは、現代世界におけるこの問題が米軍基地に集約して現れていると考えます。自由と民主主義を守るという名目で、アメリカは世界各地に米軍基地をばらまき、周辺地域に住む人々の生活と安全を剥奪しているのです。今大会は、世界最大最強の武力を持つ米軍による脅威・被害を被っている沖縄と韓国から、世界の非軍事化、非暴力に向かう果敢な闘いの最前線に立たれている高里鈴代さんと鄭ユジンさんをお迎えすることができました。世界的な米軍基地の再編成がもくろまれている状況の中で、今起こりつつある深刻な問題を報告していただきます。最も困難な闘いを繰り広げている現場からの問題提起に対して、私たちは何を応答することができるのか、議論していかねばならないと思っています。

今回のプログラムのご挨拶のことばは、中原代表が所用で不在のため代表代理の井桁と大越の共同で記させていただきました。この意義深い大会に、多くの方が参加されることを心からお待ちしております。

2007年6月1日

2. 6月24日（日）『女性・戦争・人権』学会大会のプログラム

「軍事主義に抗するフェミニズム ～沖縄と韓国の米軍基地からの報告～」

場所：早稲田大学国際会議場三階第三会議室

第一部：総会（学会の「今後」議論）と会員の研究発表（司会：岡野八代さん）

10:00-11:00 代表挨拶

会計報告

事務局報告

学会のあり方についての討論

11:00-12:30 研究発表 大橋稔さん「黒人女性の奴隷体験：現代女性作家の歴史認識とフェミニズム」（仮）

第二部：軍事主義に抗するフェミニズム ～沖縄と韓国の米軍基地からの報告～

（司会：菊地夏野さん）

13:30-13:40 「わたしとフクロウ」の意味について紹介（中原道子さん）

13:40-15:10 「わたしとふくろう」上映会（90分）

15:10-15:20 休憩

15:30-17:45 シンポジウムと討論

パネリスト： 高里鈴代さん

「沈黙を強いる力抗して声を上げる」

鄭ユジンさん

「軍事化という過程を想像するということ」

コメンテーター：秋林こずえさん

質疑応答

18:00- 懇親会

皆さまのご参加をお待ちしています。

■発表要旨

研究発表 アメリカ黒人女性の奴隷体験：現代女性作家の歴史認識とフェミニズム

大橋 稔

1619年20人のアフリカ黒人がアメリカ大陸に奴隷として〈荷揚げ〉された。これがアメリカ大陸における黒人奴隷の始まりとされている。またこの20人の中には、女性も一人含まれていた。彼／女たちは、契約労働者として大陸の地を踏んだはずであったが、契約期間が過ぎても、重労働から解放されることはなかった。そして結局、彼／女たちは奴隷という、非人間の位置へと追い込まれていくのであった。なぜならこのアフリカ出身の奴隷の労働力は、植民地時代を通じて、また独立後のアメリカ合衆国において重要な労働力であったからである。このような状況は、1863年にリンカンによって奴隷解放がなされるまでの約250年にわたって続けられてきた。植民地時代を含めた合衆国約400年の歴史において、半分以上の時代をアフリカ出身の黒人たちは奴隷として、あるいは自由人であっても、その自由は大きく制限されていたことになる？

これほどまでに長い間行われてきた奴隷制度は、現代のアメリカ黒人、特に黒人女性にどのような影響を与えているのであろうか。そしてまた彼女たちは、この奴隷体験をどのようにとらえてきたのであろうか。今回の発表では、この問いにある種の解答を与えることを目的としている。そのため発表で扱うべき期間は、奴隷制時代から現代に至る400年となる。しかし残念ながら、すべての時代を網羅することは不可能である。そこで今回の発表では、奴隷制時代と現代における黒人女性の奴隷制に関する表現に着目することによって、黒人女性の歴史における奴隷体験の問題を考えて行くことにしたい。つまり、奴隷制時代に書かれた／語られた彼女たちの奴隷体験の分析し、その後現代における黒人女性作家がこの原体験をどのように描き出し、またそこからどのようなメッセージを社会に投げかけているのかを分析することにする。

今回、発表の前半で取り上げるのは、Sarah H. Bradford, Harriet Tubman: the Moses of her People [1886]、William and Ellen Craft, Running a Thousand Miles for Freedom: or, the Escape of William and Ellen Craft from Slavery [1860]、Harriet Jacobs, Incidents in the Life of a Slave Girl: Written by Herself [1861]、Sojourner Truth, Narrative of Sojourner Truth, a Northern Slave [1850]、Mary Prince, The History of Mary Prince[1831]などである。これらの奴隷体験記には、奴隷としての体験が描かれていると共に、彼女たちが女性であるがゆえに被ることになった体験、彼女たちが社会で生き延びる術や仲間への意識が描き出されている。彼女たちのこれらの表現の分析を通じて、アメリカ黒人女性史における原体験としての奴隷体験とそれにまつわる体験の内容を明らかにする。また彼女たちが自らの体験を記した理由の分析を通じて彼女たちにとっての歴史とは何かを分析する。

また発表の後半で取り上げるのは、Alice Walker, Meridian [1976]、Toni Morrison, Beloved [1987]、Octavia Butler, Kindred[1979]などの作品である。これらの作品では、黒人女性の歴史を扱い、黒人女性と歴史との関係が描きだされている。彼女たちのこれらの表現の分析を通じて、黒人女性がアメリカという社会で生き延びるとは如何なることであるのかを明らかにしたい。

権力機構の中心から常に排除されてきた黒人女性たちは、自らの体験を記し／語ることによって、彼女たちの自身の歴史を残してきた。また読み書き教育を受けることを禁じられていた奴隷たちは、母から娘へと自らの体験を語り継ぐことによって歴史を伝え継いできた。自らの体験を語り継ぐことによって歴史を紡いできた彼女たちの伝統と、彼女たちの現在を分析することを通じて、本研究では、彼女たちの歴史認識と生き延びる戦術としてのフェミニズムとは何なのかを考えたい。

■シンポジウム 軍事主義に抗するフェミニズム ～沖縄と韓国からの報告～

沈黙を強いる力に抗して声を上げる

共に脱暴力、脱軍事化社会（真の安全と平和な社会）を築くために

高里鈴代

1 米軍再編最終合意「ロードマップ」から1年。進む日米軍事一体化、と日本の現在

—「沖縄の負担軽減」の実態は — 嘉手納基地へと新たにパトリオット・ミサイル（PAC3）とステルス戦闘機F22の配備、高江区へヘリパット建設、オスプレイ配備を隠して辺野古新基地建設へアクセス法に違反した事前調査の強行など。

—日本の軍事化は加速的に進行 — 「米軍と自衛隊がいるから日本の平和と安全が守られている」、出来高払いで地域を縛る米軍再編法案、憲法改正、教育基本法改正、防衛賞、「集団自決」記述の高校教科書からの削除問題、「慰安婦」問題など。

2 軍隊という構造的暴力 —ジェンダーの視点で問い直す軍隊の本質は「殺傷と破壊」

— '93年の世界人権会議と '95年北京会議で「武力紛争下における女性の暴力は戦争犯罪、人道に反する罪」と定義したこの視点は、戦場に直結する軍隊駐留下における強かん、暴力を捉え直すことを促している。

— 相互に補完し合う軍事主義と父権・家父長制社会では、駐留米軍の優位な地位は保持されるのみならず、住民が被ってきた甚大な被害、暴力（爆音、演習事故、人権侵害、環境破壊など）と相殺しうるかのように、地域への経済貢献を強調し、軍人の私人化、米兵犯罪を矮小化する。

— 「基地・軍隊を許さない行動する女たちの会」がまとめた「戦後・米兵による女性への性的犯罪」年表には、いかに沈黙を強いてきたかの歴史が浮かび上がっている。

3 軍事主義、再軍事化に抗して声を上げ、脱軍事化の社会へネットワークを築くこと

— 「安全保障」を再定義する。軍事主義、軍事化、軍隊をジェンダーの視点から問うことが求められる。真の安全保障とは?@生命を維持する持続可能な環境、?A衣食住と医療、教育?B尊厳、文化アイデンティティの尊重、?C人災からの保護など。

— 暴力によって傷つけられた女性、子ども、人々が回復し自立する支援体制の確立を。

— 安心して暮らせる自立経済、環境、文化をはぐくむ共生社会を切りひらく。「東アジア・アメリカ・プエルトリコ軍事主義を許さない女性ネットワーク」の共同作業を通して築く。今後はアジア太平洋地域や世界にも。

— ジェンダー偏向の不平等な地位協定の改正、また特に米国の国際刑事裁判批准を。

軍事化という過程を想像するということ

— 韓国の志願制への主張と沖縄米軍基地をめぐる「負担軽減論」を中心に —
鄭柚鎮

1. 過程としての軍事化 ? 痛みをめぐる利害関係者の拡張を中心にして

私たちはどういう状況を軍事化された状態、あるいは軍事化の過程だと言っているのかに対してお話ししたいと思います。具体的には、韓国社会で展開されている志願制への主張と、沖縄の米軍基地をめぐる負担軽減というロジック、つまり、基地再編が沖縄住民の負担を減らすという日米政府の主張が、実は、軍事化をより強化させる機制として作動しているのではないかということについて問いかけたいと思います。

2. 負担軽減というロジック

ここで、韓国での志願制への主張や沖縄の米軍基地をめぐる「負担軽減論」を言及するのは、二つそのものを批判的に分析するというより、二つの主張の主な論拠となっている「負担軽減、あるいは被害の最小化（次善の策）」という論理が、実は、軍事化を強化させる機制として働いていることについて考察するためです。

2-1. 志願制を求める主張

志願制を求める主張は、徴兵制に密接な関係を持っているにもかかわらず、全面的に表面化されなかった（できなかった）「女性」/「障害者」/「混血」など「健常な男性」以外の主体らを徴兵制に関わる議論で排除している点において、軍隊を必須不可欠な存在、すなわち軍事力に依存した国家安保というのを前提にしている点において、一生付きまとう社会的な不利益を甘受し「銃をとることを拒否する権利」を訴える兵役拒否者の政治的な感性を制度改善の問題として単純化して捕らえてしまう点において、極めて論争的な問題だと思います。

わたしは上述したことを前提しながら、次の三つの問題に関して考えたいと思います。

1) 結局のところ「誰が志願する者」になるのかということです。

2) 特定階級の人々が職として軍隊を選択したとき、究極的に得をする集団はいったい誰なのかということに関わる問題です。

3) 特定の階級の人々が軍隊を職として選んだとき、その社会はどのように変貌してゆくのだろうか、という問題です。言い換えれば、「誰もがやりたくない仕事」との感情的/職業的隔離を制度化することによって、社会構成員が軍隊の存在より発生する痛みと絶縁されるようになる問題です。

2-2. 負担軽減というロジック

「沖縄の負担を軽減するために」という修飾語は、アメリカと日本の軍事一体化、日米同盟の強化を主張する側よりよく使用されていて、負担軽減というロジックは県外移設論の論拠として働いていると思います。

わたしは、1) 反基地/反軍事という原則的な抵抗の声が消されていくという側面から（国家や軍隊の存在を問わない問題）、2) 海外に駐留する米軍を再編してヘゲモニーを拡張しようとするアメリカの軍事戦略を個別地域の問題として内面化してしまうという立場から、3) 日米安保条約の問題を問わないという問題性から、4) 日本と沖縄の反基地平和運動のあいだのつながりを断絶させるという側面から、県外移設論を批判することなどを前提としながら、県外移設論/海兵隊のグアムへの移転論の主要な論拠として働いている「負担軽減（次善）」という言説に関してお話ししたいと思います。

負担軽減というロジックは、韓国の志願制への主張と相当部分で重なり合っています。それは、痛みを統計化・計量化して言うことの問題性と負担軽減という言い方の使用をめぐる主体の問題として区分けしてお話できると思います。もっと絞って言うなら、誰が誰の痛みを計量して言っているのか、誰が「あなたの負担を軽減させてあげるよ、あるいはあなたの負担が減っているぞ」と言っているのか、という問題になるでしょう。痛みを裁断し、痛みが少し減っているのはいかど、強弁しているものは誰なのかということです。痛みをめぐる利害関係を不可視化させてしまう議論こそが、問われるべきだと思います。

3. 「彼/女ら」と「私」との関わりを問う女性運動

「ドゥレバン」代表である劉英任は、国家により主導される統一運動、多くの活動家により主導される反米運動または平和運動のはざまに、両方ともイデオロギーばかりであってそのなかで被害を受けているものの姿が見えない現実の問題性を可視化/政治化しなければと思って、基地の村の女性の日常を描いたドキュメンタリー映画『私とフクロウ』を作ったと述べています。

痛みを関係として見つめて表面化しようとする営みは、痛みをめぐる利害関係者を拡張させるに重要な手がかり（痕跡）となると思います。被害当事者を規定するというより、当事者としてみなされる彼/女らと私との関わりを問う活動、痛みをめぐる利害関係の幅を広げていく実践を通じて、軍事主義に抗する女性運動のビジョンは提示されうるのではないかと思うのです。

* キーワード : 軍事化、感情、利害関係、関係性、痛み、女性運動